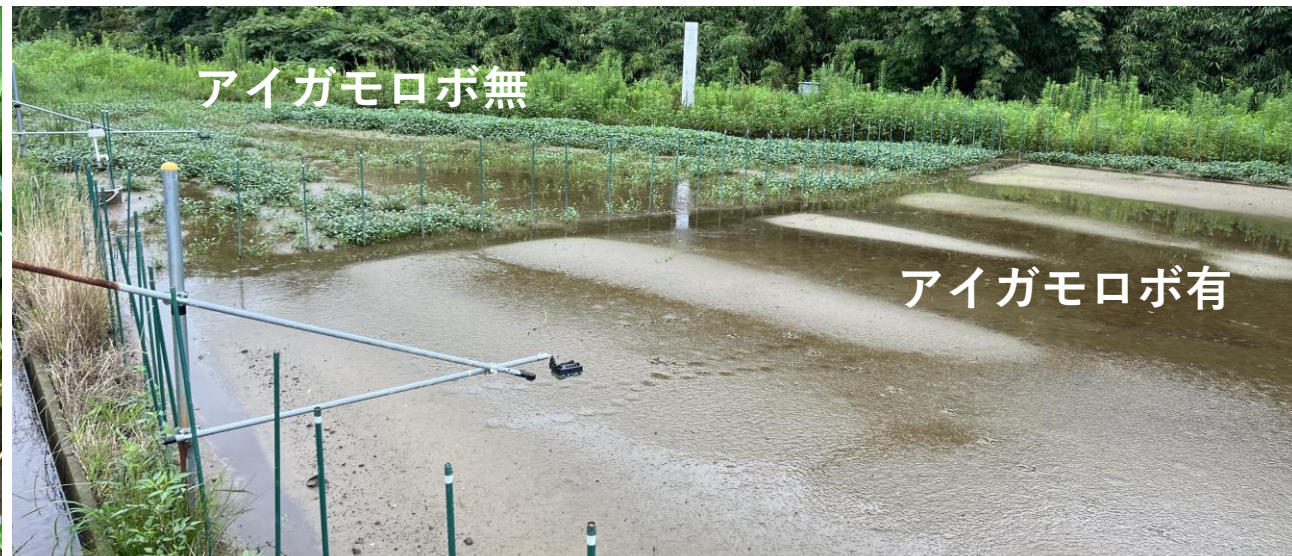


【2024年度実証実験先の声 株式会社TDK】

「株の張りが明らかに良く、稲を植えない実験圃場での違いも明らか。発売後は数台購入し実験を継続する。」



【JA新宮城との取り組み】

JA新宮城(旧栗っこ)の有機米はほぼ全数買取、今年からはJA新宮城(旧みどり野)の有機米も買取、大崎市の小学校全校での学校給食へ提供するなど、JAからのJAS有機米(転換中含む)の出口をサポート

(7) 第3911号 特集 (毎週火曜日発行)

農業新聞

(第三種郵便物認可)

令和5年(2023)6月20日



齋藤さん

またアイガモを飼つとも検討したが、小屋と柵の設置や猛禽類などへの空からの対策も必要なことから難しいと判断した。



アイガモロボ (イメージ) と自動操舵は欠かせないと話す



試食会



試食会

宮城県栗原市の齋藤さん 自己都合で田植できて心労から解放

有機米生産でアイガモロボ10台導入

宮城県栗原市は、かつて伊達藩の穀倉地帯として稲作が盛んな地域。そうした中で齋藤政憲さん(72)は、一迫地区で有機農業を行う事一筋50年。有機米生産に取り組んできた。その齋藤さんは現在、15畝で有機JAS米生産を手掛けている。そうした中で有機米デザインのアイガモロボを10台、会長を務める一迫有機の会で計15台導入する。心労を減らせるメリットは大きいと話す。また自動操舵を使った田植機を利用することでも心理的負担が緩和できると満ち足りた。その齋藤さんに話を伺った。

取材当日は、農繁期で、折を経て、現在ではキューホーの水田用除草機をいえ機械で濁らせて抑草理やちようどいいタイミングで代掻きをするのはい心地は最高」と評価し、斬新だった」と当時を振り返る。2年間の実証も協力する中で「苗が丈夫になつたり、メタンガスの発生が少なく、SDGsやカ田植えをしなくてはならないことから、気持ち的に焦りがつきまとい、それが一番の心労となる」と齋藤さん。「このロボットの開発に取り組んでいて、Youtubeでの初公開の前既に試していたそうだが、炭を流して太陽光を遮断する考え方もあったが、いつまでも濁って

来、自分なりの有機農業を行うべく、「化学肥料を使わず消毒しない」をモットーに米作りを行ってきた。その中で除草作業が長年ネックとなっていた。チェン式をはじめ、色んな機械を検討・使用してきたが、15畝を70枚(一枚あたり平均20枚)保有する中で、ワンオペ作業なので、回数入るのは難しいと判断した。

またアイガモを飼つとも検討したが、小屋と柵の設置や猛禽類などへの空からの対策も必要なことから難しいと判断した。



ログイン・利用登録

ようこそゲスト 様

9月4回

10月1回

アイガモロボのお米

東都みのり

56073

有機福島無の会のお米 (福、笑い)2kg

75752

有機宮城ササシグレ (齋藤さんのお米)2kg

除草作業中のアイガモロボ (2022年版・2023年の市販化に向けて改良中)

アイガモロボは、東京農工大発のベンチャー企業である「有機米デザイン株式会社」が開発しました。(商標登録中)